

# 日置の伝説 ③



矢竹の森

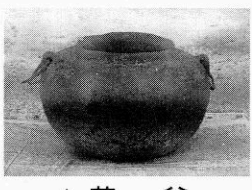


## 七不思議 “ 矢竹の森 ”

千畳敷から尾根伝いに西へ向うと野田に至るがそこに「矢竹の森」と云う塚がある。往昔永祿の頃（今から四五〇年前）、俵山温泉里の野田と云う所（現在の俵山公民館周辺にあたる。）の郷士某なる者が秋の取入れも一段落し長い冬にさしかかる頃、早朝から弓矢を携え愛犬と共に猟に出た。俵山安田の深い峠を越えると日置の里が一望眼下に広がり遙か彼方に矢ヶ浦、千畳敷、雨乞と山並みが連なり、まさに壁となつて豊かな日置盆地を囲んでいる。昔からこの地を日置と云うが、壁即ち壁と連なっていることが日置の地名の由来ではないだろうか郷士某は独り言をいいながら先へと急いだ。五里（約二〇km）は歩いたであろう、やがて千畳敷の奥深い狩場に着いた。早速に獲物を求めて草むらの中に入った。そのうち動く物を確かに見た。弓の弦から矢は放たれ草むらの動きに命中したと同時に悲鳴を聞いた。駆け寄るとそこには野猪と思しきや何んと連れて来た犬の哀れな姿であった。誤りとはいえ愛犬を射殺して、ただ呆然とするばかりであった。郷士某はその地に穴を掘りねんごろに埋葬し塚を造り矢竹を折って挿し印とした。

その後弓矢を持つことはなくこの地にあつて農業に励み犬の供養をしたと云う。そしていつの間にか塚の矢竹は芽をふき、後に「矢竹の森」とも「犬塚」とも云うようになった。ここの丘陵地一帯を野田と云うのはその郷士の俵山野田に因んでつけられたと伝えられている。風土注進案によると「野田村の名義は古老の伝説とて出せるは例の信じ難き趣ながら往古當郡俵山温泉の里、野田と申地より郷士某此地に來り狩せし時、過て犬を射殺し其所に塚を築き、某身も終に來住せしに依て古郷の名を採て此地をも野田と稱せし由申伝候」と記してある。

か、次の説もあつたと云う。大和朝廷の時代、長門には穴門国造と阿武国造「阿牟君」（現在の萩市大井地方か）の統治下にあつて向津具を向津野大済と呼び大済は海の奥の入り江を意味していた。向津野の「野」を取りだし田を付けて野田とした。然し向津野大済の野に縁ある称の考あれどもそは謬と云へり（防長風土誌）とある。広大な丘陵地は日あたりもよく農耕には適地である。俵山地方から開作のために入植して来たとしても不思議ではない。野猪や小動物も多く住んでいたであろう。先人達の並々ならぬ辛苦によつて良田となつた。藩政時代から今日に至るまで防長三州の良質米を産し続けているのである。因みに当時の物か判明し難いのだが古い茶釜がK家に保存されている。同家の古老によると、「若い時からその言い伝えを聞いて今日まで大切にしている」とのことであつたが、郷士某の茶を沸かしたのか古い鉄釜は錯により型を残すのみである。



▲茶釜

執筆 岡藤正作